

今年の桜は入学式まで咲いていました。葉桜の景色から、ツツジやハナミズキも開花してきました。

現在会員登録数 4,238 人さま。次号は 5 月 21 日発行の予定です／

＋----- ◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち ※今月は休載です

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

■-----■

【1】お知らせ

■-----■

●「第 156 回日本児童文学学会 関西例会」

講演「マンガ研究誌『ビランジ』創刊の頃 -1980~90 年代のマンガ批評-」
(講師：竹内オサム(同志社大学名誉教授) 他、研究発表

日時：5 月 18 日(土) 13:00~16:30

会場：大阪府立中央図書館 多目的室 定員：60 人 参加費：無料

主催：日本児童文学学会 関西例会 (IICLO 共催)

詳細・お申し込みは→ Peatix <http://ptix.at/07UKdV>

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いします。

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable(シンカブル) = クレジットカードでご寄付いただけます。

継続寄付(毎年/毎月)、単発寄付が選べます。

→ <https://syncable.biz/associate/19800701/>

● YouTube 版「本の海大冒険」 <https://www.youtube.com/@iicloll196>

※公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/ml_youtube/index.html

● 当財団公式 X(旧 Twitter) → https://twitter.com/IICLO_News

【2】コラム

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Yukiko's Talk

『僕たちは星屑でできている』 マンジート・マン/作 長友恵子/訳
STAMP BOOKS 岩波書店 2024年1月 対象年齢：中学生から

* 今回のゲストは武庫川女子大学教員の福本由紀子さん (Yukiko) です。

あらすじ：イギリスに住む高校生のナタリーは母を癌で亡くし、兄ライアンは満足な職が得られず、移民のせいにして差別的な行動をとるようになる。ナタリーは母の遺志をついで、難民救済チャリティーのために、ドーバー海峡を泳いで渡ろうとする。一方、父が政治的な理由で殺され、アフリカのエリトリアからイギリスに逃れようとするサミーは、旅の途中で幾多の困難に出遭う。二人が出会うまでとその後が、散文詩の連作として表現されている。

Yukiko：この作品は、「366日前」から始まって、「366日後」で終わっています。何の「366日前」なのか、想像しながら読むことができ、真実を知ったときはショックを受けました。

Yasuko：いわゆる、単純なハッピーエンドには描かれていません。それは、難民の現実の厳しさを描くために必要だったのだと思います。

Yukiko：作品は、イギリスに住むナタリーと、エリトリアからイギリスに行こうとするサミーの一人称のことばで構成されています。「366日前」のようなタイトルがあり、そこに二人の語りが重なり合うようになってきます。そして、視点が変わるときには、必ずキーワードがあり、そのことばが重ねられています。たとえば、ナタリーが母親の死以来、「この家の中に／ずっと／隠れていた／気がする。」と語れば、サミーの語りは「この家の中に／ずっと／隠れていた／気がする。」から始まって、徴兵を逃れるために家に隠れている事実が明らかになっていくというようにです。これによって、二人が対として読者に強く意識づけられます。

Yasuko：散文詩で構成された作品はラップなどの流行のせいか、英語圏のYA作品では最近増えています。この作品では、一つの詩に二人の声が聞こえるという形態が特徴的で、朗読劇をみるような気持ちで作品を読みました。

そして、対という意味では、この作品にはたくさんの対の概念が読み取れます。ナタリーとサミーのみでなく、生と死、ドーバー海峡のイギリスとフランスの海岸、父と母（ナタリーは母を亡くし、サミーは父を殺されています）、ナタリーと兄の難民に対する態度、サミーと幼馴染と一緒に旅をするテスファイ……などです。

Yukiko：こういう対が描かれながらも、サミーの父は、「人間は星屑にすぎないんだよ、サミー」と言い、「どんなに闇が深くなろうとも空には星が輝いている」と言います。こんなふうに、宇宙という大きな視点から人間を見て、人の平等を説くところも興味深いと思いました。

Yasuko: ナタリーとサミーは同じ「人間」であり、二人とも親の死を悲しんでいる若者です。共通点の多い二人にもかかわらず、二人の人生は大きく異なります。それはなぜなのか。この作品はそのことを問うています。

Yukiko: 最初に言ったように、ラストは衝撃的でしたが、ナタリーとサミーの両親が子どもを愛していること、二人が希望を持ち続けるところが救いでした。難民の現実を感じるために、ぜひこの作品を読んで欲しいと思いました。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第104回「三人兄弟の医者と北守将軍（韻文形）」

音楽のままに

『児童文学』第一冊（1931年7月）に発表された「北守将軍と三人兄弟の医者」（当メルマガ No.150）には、これ以外に三つのバージョンがあって、「三人兄弟の医者と北守将軍（韻文形）」もその一つです。「北守将軍と三人兄弟の医者」は、この韻文形に手を入れることによって成立したから、「律動的散文」になったというのは天沢退二郎です。当メルマガでも、「北守将軍と三人兄弟の医者」について「戦場から戻った将軍のことばは韻文形で歌われて、小さなオペラのような楽しい作品です」としましたが、将軍のことばには、韻文形がほぼそのまま残っているのです。

「三人兄弟の医者と北守将軍（韻文形）」の書き出しは、行分けの詩のようになっていますが、やや説明的、散文的な印象です。ところが、将軍が登場すると、急に調子が高くなってきます。――「せなかのまがった大將が／馬に乗って先頭に立ち／剣を抜いて高く歌っている。／「北守将軍のプランペラポラン／いま塞外のくらしい谷から、／やっとのことで戻って来た。（以下略）」

将軍は、七七、あるいは七五を基調としたリズムで語ります。将軍の名前は、「北守将軍と三人兄弟の医者」ではソンバーユーでしたが、韻文形はプランペラポラン、まるでオノマトペです。将軍の脚が硬直して馬と一つになってしまったというのは、「北守将軍と三人兄弟の医者」と同じですが、まず、やっかいになるのがホトランカン人間病院で、これも、オノマトペのようで耳なじみがよいのです。そして、韻文形は、人間と馬と植物の三つの病院に世話になったあと、王様のところへむかう凱旋の行進の場面で終わります。冒頭から聞こえていたチャルメラ（ピーピーピーピー、ピーピーピー。）や豆太鼓（タンパララタ、タンパララタ、ペタンペタンペタン。）の音とともに軍歌が歌われ、音楽のままに幕を閉じます。

この韻文形が散文の「北守将軍と三人兄弟の医者」に書きかえられたとき、郷里に帰る将軍のすがたや、戦わざるをえなかった者への深い慰藉という主題も、ようやく現れることになるのです。（馬車別当）

（本文の引用は、角川文庫版『インドラの網』によりました。）

《3》子どもの本の珠玉のことば 58

「こっちは こっちはよう！みえないの？はやくはやく！いのししが、わにのせなかをわたってきます。みんな、そろそろ、そのあとからわたってきます！おねがい、はやく、はやくってば！」

(『エルマーのぼうけん』 ルース・スタイルス・ガネット/さく ルース・クリスマン・ガネット/え わたなべしげお/訳 福音館書店 1963年7月 *引用は1979年11月新版第19刷より p.107)

子どもの頃にまずは母に読んでもらい、次に自分で何度も読んで楽しみました。今回ひさしぶりに読み直すと、子どものときに読んだ感覚がよみがえってきました。そして、一番わくわくしたのがこの文だったことを思い出しました。

『エルマーのぼうけん』は、「ぼくのとうさんのエルマーが小さかったときのこと」の体験を語るという粋物語です。エルマーが世話をしたのら猫に、空を飛んでみたいと言うと、猫はどうぶつ島にとらえられているりゅうがいると言います。そこで、エルマーは隠れて船に乗り込み、助けに行きます。

エルマーはみかん島にたどりつき、みかん島とどうぶつ島の間にある「びよんぴよこいわ」をわたり、どうぶつ島に到着します。エルマーはそこで、ねずみや、いのししや、サイやライオンに出会い、知恵を使ってりゅうがとらえられているところまでたどりつきます。その冒険を私は、「ああ、みつかる」「ああ、とらえられる」「りゅうがいためつけられるのでは？」とひやひやどきどきしながら読みました。動物たちと別れたエルマーは、わにの背中を歩いて川を渡り、ついにりゅうに出会います。そこで、引用にあるようにりゅうが言った気持ちは、私が感じていた気持ちとぴったりし、文字を追う自分の速度がもどかしい気持ちでした。

最後にエルマーがりゅうの背中によって空を飛ぶ場面は解放感がありましたが、私にとってのクライマックスは、エルマーがりゅうに出会ってりゅうのロープを切るところでした。

私は、クリスマスプレゼントに続きの2冊をもらいました。この2冊は、母に読んでもらってから自分で読むのではなく、最初から自分で読みました。一人で読めたこと、そして内容が理解できて楽しめたことに、満足したことを覚えています。特に『エルマーと16ぴきのりゅう』(1965年9月)で、りゅうに家族がいたことがうれしかったです。(Y)

《4》 行って来ました！

明石市立文化博物館で5月19日まで開催されている「エルマーのぼうけん展」に行ってきました。『エルマーのぼうけん』（ルース・スタイルス・ガネット/さく ルース・クリスマン・ガネット/え わたなべしげお/訳 福音館書店 1963年7月）が日本で出版されてから60周年を記念した展示で、『エルマーのぼうけん』『エルマーとりゅう』『エルマーと16ぴきのりゅう』の原画100点以上、試作本、イラスト、ノート、人形、写真などが展示されていました。

まず、興味深かったのは、子どもも楽しめる工夫がなされていたことです。動物や植物の絵のパネルの間を通りぬけたり、わにの背中をジャンプして渡ったり、りゅうの飛ぶ音や動物の鳴き声が聞こえたりして、「エルマーのぼうけん」シリーズの物語の世界で遊んでいる気持ちになりました。

また、作者のルース・スタイルス・ガネットの義理の母であるルース・クリスマン・ガネットの描いた「エルマーのぼうけん」シリーズの原画は見ごたえがありました。ほとんどが緻密な鉛筆画で、思ったよりも小さいサイズです。ジャングルの描写などは、黒一色なのに、色が見えるような気がしました。絵からはりゅうや動物の表情や動きが感じられて、りゅうや動物たちに話しかけられているような気がしました。

エルマーとともにだちになったりりゅうのからだには「きいろとそらいろのしま」があります。カラー原画のレモンのような黄色の色が美しく、こんなりゅうに乗って空を飛んでみたいと思いました。

会場には、ルース・スタイルス・ガネットについての紹介、作者の写真、挿絵を描いてもらうために、作者がつくったフェルトのぬいぐるみや、見返しの地図などもありました。地図は、作者のメモと実際に描かれた絵が見比べられ、二人によって「エルマーのぼうけん」の世界が想像豊かに広がったことがわかりました（K）。

明石市立文化博物館 <https://www.akashibunpaku.com/>

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

今月は休載します。

来月配信の次号（N0.165）からは、第4章「宮川ひろ」です。

<これまでの連載はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

■-----■

【3】全国のイベント紹介

■-----■

● JBBY50周年連続講座「日本の国際アンデルセン賞作家たち」第1回
「時代の寵児 安野光雅の世界 美術館の仕事から学んだ安野本の面白さ」
講師：廣石修（元安野光雅美術館副館長）

日時：5月18日（土）14：00～16：00 ※有料、要申し込み
会場：出版クラブビル（千代田区）およびオンライン 各50人定員
主催：日本国際児童図書評議会（JBBY）

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■
【4】プレゼント

■ ----- ■
今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『僕たちは星屑でできている』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ 応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/lGzdaWoDzE4pc7ku8>

締切は5月10日（金）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

— | — | — | — | — | — | — | — | — |

最近、あまり見ないと思っていたツバメを見かけました。ツバメが巣を作る家は栄えるということを知ったことがあります。花粉症のために外に出るのが億劫になりますが、ツバメが青空を飛ぶ姿を思い浮かべると、散歩に出かけてみようかと思えます。(TA)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp

